

長崎 海洋ゴミ調査レポート(2025)

【日程】

2025年8月27日～29日(3日間)

【調査場所】

三重漁港～対馬(椎根海岸、小茂田海水浴場)

1日目：船上での調査準備と実地調査(男女群島周辺)

実施内容：

- ・ 三重漁港より出港
- ・ ベッドメイキング・船内生活の準備
- ・ 調査方法と調査器具の確認
- ・ 漂流ゴミの目視調査
- ・ 男女群島周辺での漂流ゴミに関する説明

調査方法の詳細：

長崎大学の4年生のお二人より、調査方法と器具の使い方について指導を受けた。調査は、船の操縦席から目視で海面を観察し、ゴミを発見次第、以下の手順で記録した。

- ・ 傾角度板を用いてゴミとの距離を測定
- ・ ゴミの種類、色、大きさ、距離、発見者の名前をタブレットに入力

特に印象的だったのは、乗組員や大学生が100メートル以上離れた場所の小さなゴミを素早く見つけていたことだった。自分も挑戦したが、最初は難しく、観察眼の重要さを痛感した。

対馬に近づくにつれて漂流ゴミの量が増加しており、目に見える形で環境問題の深刻さを実感した。

船内生活：

- 食事：食事担当の乗組員が用意してくださった。栄養バランスのとれた料理で、量は多かったが美味しく完食。
- シャワー：2人ずつ交代で使用
- 就寝環境：2段ベッドは狭く感じたが、実際には足を伸ばせて快適に眠ることができた。

男子4人は全員2年生で、出港してすぐに打ち解け、リラックスした雰囲気で生活を送ることができた。

2日目：対馬上陸・椎根海岸での漂着ゴミ調査

実施内容：

- 対馬・厳原港に到着
- 椎根海岸での漂着ゴミの調査
- 対馬 KAPPA さんによる案内と講話
- 小茂田海水浴場での入浴・休憩
- 厳原市内で昼食、対馬市交流センターで講話

調査の様子と印象：

椎根海岸に到着して最初に驚いたのは、海岸の「カラフルさ」だった。しかし、その色とりどりの物体の正体は、ブイやペットボトル、発泡スチロールといったゴミだった。海岸の調査では、清水先生と大学生の方々がロープでエリアを区画し、一区画(9 m²)ごとにゴミを回収。わずか9 m²の区画でも、すぐに買い物カゴがいっぱいになった。

回収したゴミの多くは、韓国や中国の製品だった。他にも日本、マレーシアのものが混じっていた。2時間かけて区画外のゴミも集めたが、海岸からゴミがなくなる気配はなかった。海水は透き通っていたが、それとは対照的に海岸はゴミで覆われており、大きなショックを受けた。

対馬の印象:

対馬は今回が初上陸だったが、思ったよりも建物が多く、韓国人観光客の姿も多く見られた。看板や店の表記にも韓国語が使われており、韓国との地理的・文化的な近さを実感した。

対馬 KAPPA さんのお話:

対馬 KAPPA さんは、行政と地域住民・企業などをつなぐ「中間支援組織」として活動している団体で、多くの清掃活動や地域連携を進めている。印象的だった言葉は、

「つながりができる、維持しなければ衰退してしまう。次の世代が想いを引き継ぐ必要がある。」

というメッセージだった。環境問題は一過性の活動ではなく、継続的な取り組みが重要だと再認識した。

3日目:まとめ・感想発表

実施内容:

- レポートの下書き
 - 全体の振り返り
 - 船内の掃除
 - 一人ずつ感想を発表
-

【全体の感想】

今回の海洋ゴミ調査を通して、日常では見えにくい「海洋ゴミ問題」の現実を、自分で確認することができた。特に印象に残ったのは、透き通った海水とは裏腹に、海岸に大量に漂着していたゴミの光景である。

また、実際の調査方法を学び、道具の扱い方やデータ記録の重要性を体験する中で、環境問題は「感覚」や「意識」だけでなく、「科学的な記録と分析」が不可欠であることも学んだ。

対馬 KAPPA さんのお話を通して、環境保護には地域の連携と世代を超えた継続的な活動が必要であることを知り、今後、自分自身がどのように関わっていけるかを考えるきっかけになった。

海の美しさを守るためにには、まず「知ること」「行動すること」から始まる。今回の体験を無駄にせず、これからも環境に対して関心を持ち続けたい。

【参考資料】

